

学位論文及び審査結果の要旨

横浜国立大学

氏名	星名美幸
学位の種類	博士(学術)
学位記番号	環情博甲第1907号
学位授与年月日	平成29年3月24日
学位授与の根拠	学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号)第4条第1項及び横浜国立大学学位規則第5条第1項
学府・専攻名	環境情報学府 環境イノベーションマネジメント専攻
学位論文題目	ギアチェンジの時期にあるがん患者の看護のあり方に関する研究 ー病棟看護師と医療専門職者の連携・協働についてー
論文審査委員	主査 横浜国立大学 教授 安藤孝敏 横浜国立大学 教授 志田基与師 横浜国立大学 教授 周佐喜和 横浜国立大学 准教授 長谷部英一 聖学院大学 准教授 堀恭子

論文及び審査結果の要旨

終末期になりがんによる痛みや苦痛な症状が抑えきれなくなると、がんの進行を抑えるための治療を中止して、苦痛な症状の緩和を積極的に行う治療へと移行する。この時期を「ギアチェンジ」と呼んでいる。がん患者にとって「ギアチェンジ」することは、自動車というギアが「トップ」からいきなり「バック」に入ったような急激な変化に襲われ、なかなか現状を受入れにくい状況となる。本学位論文は、入院治療中のギアチェンジの時期にあるがん患者を支える病棟看護師に焦点をあて、他の医療専門職者との連携と協働のあり方について検討したものである。

第1章では、がん患者にかかわる看護とその現状が記述されていた。1981年以来、がんはわが国の死亡原因の第一位であることから、がん対策を総合的に推進するために2007年4月よりがん対策基本法が施行され、2012年6月のがん対策推進基本計画に「がんになっても安心して暮らせる社会の構築」が盛り込まれた。それらは、がん患者が主体となる医療の推進であり、治療だけでなく療養生活の質も重視して支えていくことの重要性を示しており、がん専門病院などの高度で先進的な医療から緩和医療へのシームレスな医療体制の充実がこれからの課題であった。そして、本論の重要な概念である「がん患者」「ギアチェンジ」「連携・協働」が整理されて記述されていた。

第2章では、ギアチェンジの時期におけるがん患者の役割期待に関する検討が行われた。ギアチェンジを告げられ意思決定する前のがん患者と、その後のがん患者の役割にはどのような変化が起きているのかを明らかにし、「看護師から患者への役割期待」、「医師から患者への役割期待」、「家族から患者への役割期待」、「病院からの役割期待」の4つに分類して分析が行われた。その結果、ギアチェンジポイントを境に看護師・家族・医師のがん患者への役割期待は変化し、これらの役割期待が概念枠組みの図として提示された。

第3章では、ギアチェンジの時期にあるがん患者への看護師と医療ソーシャルワーカー(以下MSWとする)の連携のあり方に関する検討がなされた。看護師とMSWへのインタビューデータは修正版グラウンデッド・セオリー・アプロー(M-GTA)の手法を用いて分析された。その結果、医師よりギアチェンジについて説明をされた後の患者とその家族の反応は、「がん患者・家族の退院後の方向性が一致しているもの」、「がん患者・家族の転院後の方向性が一致しないもの」、「がん患者・家族共にギアチェンジを納得していないもの」の3つに分類された。それらの内容から、ギアチェンジの時期にあるがん患者の経過とともに看護師とMSWが提供する看護と援助の連携について明らかされた。

第4章は、終末期医療に移行していくがん患者にかかわる看護師と医療専門職者の協働に関する

る検討が行われた。日本の医療政策の一つとして医療施設の機能分化による医療費抑制が重要な課題となっている。大規模な病院で治療をするも先進的医療の効果があらわれず、医師にこれ以上の治療が患者の負担を大きくすると判断されたがん患者は、入院後間もなく、緩和治療病棟を有する病院やホスピスなどの転院もしくは在宅ケアなどの療養生活を勧められることとなる。一定の期間内に退院の決意ができなかったがん患者らは、病状の進行からホスピスなどへの転院のタイミングを逃してしまうこともある。それが、社会問題にもなっている「がん難民」である。この章では、ホスピスケア病棟と在宅へ転院することのできた高齢者のがん患者の事例を対象とし、退院支援を行う看護師と MSW の協働の方法が検討された。フォーカスグループインタビュー法を用いてデータが収集され、質的帰納的分析が行われた。その結果、6つのコアとなる主要コードと17の副次コードが抽出され、ホスピスなどへ転院はできたにもかかわらず、どのケースにおいてもがん患者は「困難な転院」へと到達していたこと、終末期医療における転院に関しては、看護師は他の医療専門職者の協働が不可欠であるということ、これは単に、がん患者と看護師の信頼関係が構築できただけでは転院はうまくいかないということが明らかにできた。

第5章では、各章の研究結果を踏まえ、ギアチェンジ期のがん患者が終末期に移行するなかで、がん患者の困難な転院を支える看護について考察された。ギアチェンジに向けて環境が整い、すべてが順調にいてもギアチェンジをするには、必ず一定の時間を要することそしてどのような場合でもがん患者は「困難な転院」を感じながら、退院など次のプロセスへと進んでいくが明らかにできた。その中でそれぞれの医療専門職者ががん患者と良好な関係を築いていても、看護師と MSW の連携・協働が不十分な場合は、ギアチェンジが上手くいかないことも分かった。さらに、がん患者はそれぞれの状況に応じてギアチェンジポイントに近づいていき、そこに最も近づいた時にこそ看護師と MSW をはじめとした医療専門職者は連携・協働を強め、患者をサポートしなければならない時期であることも明らかにできた。

本学位論文は、これまでほとんど注目されることがなかった終末期がん看護の連携と協働のあり方の一端を解明し、変化するがん患者への役割期待の理解とがん患者にあった看護方法の工夫により、質の高い看護の提供が可能となり、残された時間の少ない終末期がん患者の QOL 向上へと繋げられる意義のある研究であった。審査委員による本学位論文の内容に関する質疑に対して適切に回答できたこと、その他の学力・業績と合わせ、専攻の学位審査の基準に照らして博士の学位の授与に十分であると結論し、審査員は全員一致して、博士（学術）学位に値すると判断した。

注 論文及び審査結果の要旨欄に不足が生じる場合には、同欄の様式に準じ裏面又は別紙によること。